

令和6年度 自己点検・自己評価委員会活動報告

自己点検・自己評価委員会は、学校の組織及び運営に関すること、教育活動に関することを自己点検・自己評価し、学校の将来構想及び教育活動の改善と向上を図ることを目的として、令和6年度は9回開催した。

1 委員会構成員

委員長	校 長	上牧 務
委員	副 校 長	佐野 繁子
委員	事 務 長	志田 訓広
委員	看護学科教務長	和田 愛
委員	助産学科教務長	池村 さおり
委員	教務主幹	松本 めぐみ
委員	看護教師	山本 智美

2 会議実績

回 数	日 程	主な内容
第1回	令和6年 4月18日(木) 10:30~11:35	今年度の委員会活動について 今年度の活動目標と自己点検・自己評価の実施方法 会議日程の決定
第2回	5月17日(金) 13:30~14:45	今年度の各項目の活動目標と取り組みの確認 自己点検・自己評価表の修正の必要性確認
第3回	9月3日(火) 13:30~14:30	自己点検・自己評価担当者の一部変更 自己点検・自己評価の中間評価のまとめ①
第4回	9月5日(木) 10:00~11:15	自己点検・自己評価の中間評価のまとめ②
第5回	10月18日(金) 11:00~11:50	学校関係者評価会議の結果を受けて
第6回	令和7年 2月5日(水) 15:00~16:00	自己点検・自己評価の最終評価のまとめ①
第7回	2月12日(水) 11:00~12:00	自己点検・自己評価の最終評価のまとめ②
第8回	2月18日(火) 11:00~11:50	自己点検・自己評価の最終評価のまとめ③
第9回	3月19日(水) 15:00~16:00	第2回学校関係者評価会議の結果を受けて 次年度の課題

3 今年度の取り組み

目標として次の3つ、1) 学習しやすい環境を整備し活用する取り組みとその状況を確認していく、2) 働きやすい環境を整備する取り組みとその状況を確認していく、3) 本校の魅力(両学科あるよさの活用と清水病院との連携)の強化の取り組みとその状況を確認していく、をあげた。12の分野別に「強化チーム」を作り、強化チームのメンバーは他の職員の意見を聞きながら、リーダーシップを発揮して学校運営にあたった。強化チームが評価を行い、その取り組み状況、課題となることを職員会議で報告し、状況を把握した上で自己点

検・自己評価を行った。学校関係者評価会議において令和5年度の間中評価と最終評価の報告を行い、取り組みについて意見と示唆を得た。

4 令和6年度の自己点検・自己評価の結果

	点検項目	評価点	
		看護学科	助産学科
1	教育理念・目標	4 (4)	4 (4)
2	学校運営	4 (4)	
3	教育活動	4 (4)	4 (4)
4	卒業・就業・進学	4 (4)	4 (4)
5	学生支援	4 (4)	4 (4)
6	教育環境	4 (4)	
7	学生募集	4 (4)	4 (4)
8	財務	4 (4)	
9	法令の遵守	4 (4)	4 (4)
10	社会貢献・地域貢献	4 (4)	
11	国際交流	4 (4)	
12	教育力の向上	4 (4)	

※ () 内は中間評価点

5 自己点検・自己評価結果と今後の改善策

点検項目	評価点	点検結果・今後の改善策など
(1) 教育理念	4	【看護学科】 ガイダンスで、学生にディプロマポリシーと学年到達目標の関連性を説明して目標達成に向け、指導した。また、外部講師と学生の目指す姿・科目構成の関連性について説明をした。授業の進行途中で、学生の反応を確認しあった。講師会議は、6月に開催しており、講師及び実習施設関係者13人、本校教職員13の合計26人が参加し、カリキュラムの内容、科目を取り入れた理由について説明した。 保護者会では、学年到達目標と年間のカリキュラムの関連性について説明した。教育理念についての理解は95.8%が理解している・大体理解しているを合計し95.8%であり、例年通りであった。 年度初めに求められる姿や計画が明らかになることで、学生の学習姿勢や家族・外部講師からの支援が受けられる体制が整えられることから、ディプロマポリシーとの関連は年度初めのガイダンスや講師会議・外部講師、年間計画と関連付けを行うことで協力をえられるように引き続き強化していきたい。 【助産学科】 学生には入学ガイダンス時、講師には講義の依頼時にディプロマポリシーの項目と講義との関連性を伝えた。ディプロマポリシーを踏まえた講義であったか学生の評価を講師が確認できるように、授業評価のアンケートを修正した。アンケートは5が非常にあてはまる、4があてはまるという評価基準であるが、「講義はディプロマポリシーや到達目標を達成できる内容であった。」という項目は平均4.4であった。実習指導者とは、実習指導者会議や実習前の打ち合わせ、日々の実習の指導

		の中で、ディプロマポリシーを達成できるよう、学生の指導について相談を行った。2月の講師会議の事前アンケートでは、83.3%の講師がディプロマポリシーを意識して講義を行ったと回答し、76.7%の講師がディプロマポリシー達成のために、学校と検討・相談することができたと答えていた。 次年度は、今年度講義内容について相談・検討することができなかった講師と教育目標を達成できるよう時間を作っていく。
(2) 学校運営	4	今年度は看護学科教員3名・事務1名を迎えて学校運営を行った。業務の目的と予定を意識して発信し、業務の見通しを立てて仕事ができるようにした。新たに看護学科は16時ごろ10分程度、継続して助産学科は朝夕礼後、事務は月1回の担当者会を行ったことで、タイムリーな情報共有ができ、相談や仕事の優先度を確認し調整する機会になった。効果的な会議運営を目指し、多くの議事録は電子保存に変更、看護学科は検討議題提案者が検討時間を提示した。会議は予定時間でほぼ終了しており、情報提供方法の選択や建設的な検討につながるよう努める。今年度末で看護学科教員2名・助産学科1名退職のため、必要な引継ぎを機会をとらえて行い準備できるようにした。人材確保のため異動の調整や新採用募集に努めたが、両学科1名の確保にとどまっている。専任教員養成講習会に2名受講予定であり、5～12月の会計年度職員の要望は認められた。教員のネットワークを活用し確保に努めている。次年度も新たな職員を複数迎える中での学校運営となるため、引き続き目指す姿を共有しながら学校運営していく。 助産学科は長期に学外で実習指導を行う。分娩介助10例を確保するため、実習施設を追加したことで教員が施設を行き来する機会が増え、学生の学びを保障するための調整に多くの力が必要になった。そこで教員の業務効率を高めるために、学外で市政パソコンの利用について担当課と相談し、自治体テレワークシステムに2名が登録した。1月から在宅ワークを行い、次年度通信環境整備及び手続きを行い実習施設での運用を目指す。 静岡市立看護専門学校のあり方検討を今年度も所属する保健衛生医療課と両校で行っている。新カリキュラムとなり教員の授業時間数及び実習施設の受入れ変化も加わり実習施設数が増え、複数の施設を教員が行き来して指導する機会が増えた。令和7年度実習指導教員1名（会計年度職員）を資料作成し静岡校と要望したが認められなかった。人員増は困難性が大きい引き続き両校で検討し要望していく。 検討した合理的配慮の基本的な考え方、支援対象・支援範囲・支援体制、手続きについて、自治体立看護学校協議会で得た情報をふまえて、学生便覧に示す準備をすすめる。
(3) 教育活動	4	【看護学科】 シミュレーターの導入により、学生が同じ条件で学べる機会を設定することができた。シミュレーターは、状態の変化を同条件で学生に提供することができる利点がある。その利点を活かし、みて、判断したことを学生同士で話し合う体験をすることができている。気づきをシェアする体験は臨床判断の入口であるのでこのような機会は大切にしたい。40人に対し、1体という条件は時間的な制約があるので、難しさもあるが実習前のトレーニングとして小集団で使用した。具体的には、成人看護学実習の術後の状態の状況設定、基礎看護学実習の演習として、経鼻胃管チューブが不確実の挿入となっている状況を設定し、推論しながら多角的に観察する体験をグループ単位で行った。看護技術の統合では、リアルな患者を演じてもらうよう、静岡医療コミュニケーションの協力を得た。3年生の12月にかけて行うこと

		で、働く前の自身の評価をし、学習方法を見直す反応があり、学生から、看護師として働く自分を意識する体験をしていた。教員自身もここまで成長した学生の姿を確認する機会となっていた。この演習までの過程において学生が経験する技術の中に、思考・判断を問うような授業展開をタスクトレーニングとバランスをとりながらより工夫していきたい。他校の使用例や状況を知るために、セミナーの視聴を行った。 2台あるうちの平成17年購入したシミュレーターが令和4年より修理の予算が確保できず使用に至っていない。シミュレーターの特徴が異なるため、2台使用できるように令和7年度当初予算を確保して修理していく。 【助産学科】 シミュレーション教育に関しては、担当講師と清水病院看護師と調整。昨年度の課題を活かし、胎児心拍や出血等臨場感を出し、会場設営も実践に近づけた。緊張感の中、分べん介助実習Ⅰでの学びをつなげ、さらに分べん介助実習Ⅱに繋げることもできた。また、教師の行う振り返りでは、演習の目標に対してデブリーフィングガイドを準備し学生に振り返りをしてほしいことを明確にした。その結果、学生は、狙いに対し振り返ることができた。 実習においては、学生個に応じた指導を実習指導者と対応した。分べん介助実習Ⅰでは、分娩介助進行状況や、2か所の実習施設の実習体制から見学・実施できないことが出てきたが、分べん介助実習Ⅱで学びを確保できるようにした。各実習施設の協力により、学生全員が10例分娩介助できた。 実習の場面で学生から講義が生かされている声が聞かれて、講義と実習が繋がっていることを感じる事ができた。次年度も、講義と実習が繋がる学びの提供を意識していきたい。
(4) 卒業・就業・進学	4	【看護学科】 今年度の卒業見込みの3年生は1名が助産学科への進学、その他は全員就職が内定している。7月のホームカミングデイでは35名の卒業1年目が来校し、2年生と交流した。就職して数か月の卒業生に、人間関係や福利厚生について率直な質問ができた。また、実習直前には実習病院の若手看護師と交流し、就職を見据えた話を聞きどちらも就職先選択のよい判断材料になった様子である。業者の就職試験講座も開催し、地域の就職状況の厳しさを知り、インターンシップの動機付けとなった。夏休み明けには本校のインターンシップが近隣エリアで2番目に多い参加率だったと情報を得た。 1年生では、キャリアデザインという科目もあるが、同時に本校の外部講師として認定看護師や在宅領域で働くスタッフから多く講義を受けているため、様々なキャリアに出会っており、実際に認定看護師に関心を持って質問する学生もいた。新教育課程では3年次に看護研究を科目だてしケースレポートをまとめ、1月には全校生徒対象に発表会を実施した。興味のある研究発表会場に自由に足を運び1、2年生は身近にキャリアを考える機会になっていた。 3年生には国家試験受験直後にキャリアに関するアンケートを実施した。「看護学校における3年間の教育で十分に未来のキャリアを描くことができたか。」の問いに、86%の学生が「はい」と回答した。働くことに対する思いは、不安な気持ちが多い一方で、責任の自覚や期待、楽しみを表現した学生も4割程度あった。看護観を見つめ直す時間や余裕の確保を望む意見もあり、次年度は学習進度と時間割配置の工夫をしていきたい。学生の実習の様子から、指導を熱心に行ってもらえた体験

		があると憧れを抱き、あのような看護師になりたいと口にしていた。このような反応から、教員はスタッフと密に関わることで、学生が丁寧で熱い指導を受けられるような臨地実習の場を作れたのではないかと評価する。 令和7年度は、開校30周年イベントとして様々な年代や活躍をしている卒業生を身近に感じながら、在校生のキャリアビジョンを描ける働きかけをしていく。 【助産学科】 学生が国家試験の問題に慣れるよう、5回の模擬試験の年間計画を立てて9月から1月に実施した。学生がいつでも勉強に取り組めるように7月までに助産師国家試験の過去問題集や参考書等を購入した。 早まる就職試験に対応するため、入学の書類に就職先の希望調査用紙を入れ、早期からの支援につなげた。また、昨年度の就職試験の内容や今年度の募集案内を1冊にまとめ、学生に情報提供を行い就職活動を支援した。学生は7月末までに7名全員の就職先が決定した。(静岡市内4名、県中部地区2名、県外1名) 4月に卒業生との交流会を実施し、実習や国家試験対策についてイメージできたという回答が多く得られた。学生の主体的な参加を促すためにも、交流会開催前に学生へ質問内容を確認後教室に掲示していった。退学者や退学を検討する学生はいなかった。 卒業後のカリキュラム評価のアンケートを毎年行っており、昨年度からロゴフォームを導入したが、今年度は実習施設で直接会える卒業生には手渡しし依頼した。昨年度の回収率は57%であったが、今年度は85.7%に上昇した。 新カリキュラムとなり初めてのアンケートで、学科の教育目標が臨床に活かされているかを確認する内容とした。今年度は2年前に卒業した4期性に対して実施したが、全員が「活かされている」という回答であった。具体的な科目としては、「妊娠・分べん・産じょく・新生児期の助産診断・技術学」と「分べん介助技術」「産じょく期の指導技術」「分べん介助実習Ⅰ・Ⅱ」であった。これらの科目は特に学生が修得できるよう、今後もより良い授業を検討していきたい。
(5) 学生支援	4	【看護学科】 年間の縦割りチューターグループを設定し、2回の3学年の交流会と、2学年ごとの学習会を縦割りメンバーで実施した。1年生のベッドメイキング、バイタルサインの技術習得では、チューターの先輩に技術の様子を見てもらいながら練習を重ねていた。1年生は、2年生と練習日の調整をとり、直接助言を受けて、その後の教員の技術チェックに臨んだ。技術を向上させるための練習はもとより、互いの都合の中で練習時間の調整を図るという経験も社会性を学ぶ良い交流の機会となっていた。固定チューターグループで交流を重ねることで、本音で語り合っ悩み相談をしたり、日頃の学習を振り返り互いの看護観に触れることができた。日常の中で、社会人や男子学生、出身校などカテゴリーごとの繋がりでの生活上の悩みを相談しあう様子もみられ、先輩、後輩の垣根が低くなった様に感じる。3年生は、先輩として教えることの責任感や、自身の知識や技術の課題を明らかにしており、学習意欲につながっていた。縦割りの交流が深まる一方で、教えることが苦手な学生であったり、個人の相性の問題もあり、メンバー設定の見直しや再検討も必要であると感じる。各グループ教員を2人ずつ配置したため、教員の役割や業務に合わせ学生も工夫して声掛けをしていた。他にも、今年度は看学祭や講演会、研究発表会、清水病院看護師との交流会など、学年を超えた交流の時間が多くあり、学生はキャリアビジョンをもつことができていた。

		保護者からは電話や来校等、様々な形で学生の様子や履修についての状況確認の問い合わせがあり、保護者の意向を確認しながら状況に応じた対応を学年担当中心に行った。 物価高騰の折、学生の経済的負担が大きくなっていることから、奨学金や授業料減免制度に関する情報発信を適宜行っている。本年度から、扶養する子が3人以上である世帯（多子世帯）に対する日本学生支援機構奨学金給付及び授業料減免の制度が新たに始まり、2人が受給している。また、教育訓練給付金は5人が受給しており、受給証明書を逐次発行している。 【助産学科】 入学後学生に教育訓練給付金制度に関して周知を図り、利用できる環境を整えている。 分べん介助実習は、今年度も2施設で実習を行うグループもあり、学生の病院間の移動の調整や教師の配置などに対し配慮しながら実習支援を行った。実習にあたりマチコミを用いた体調管理の徹底を図り、NICU実習では消化器症状のある学生に対し、後日補修実習の調整を行った。 ディプロマポリシーと到達目標を講義要綱に記載するとともに初回の講義で説明し、学生への意識づけを行った。入学後に担任教師・実習担当教師との面談を実施し、学生の状況を把握し講義・実習の支援に役立てた。面談の時期については丁度よいと答えていた学生がほとんどであったことから、来年度も同様の時期に実施していく。4月末に卒業生との交流会を行い学校生活や実習のイメージがついたという意見が多く聞かれたため、来年度も継続していく。今年度は看護師経験のある学生が多く、6月末までに多くの講義と演習を行う中で、様々な経験や価値観を活かしながら、ストレートの学生と共に協力して課題を進められるよう、面談を行い教師間で情報共有しながら支援した。次年度も看護師経験のある学生に対し、助産の初学者として学生全員で協力し合えるよう支援していく。
(6) 教育環境	4	今年度の空調修繕は管理棟（講師控室、会議室、研究室1・2・3、校長・副校長室、保健室）と在宅看護実習室を修繕した。昨年の教室修繕により学生が個人の扇風機を利用して暑さをしのぐ場面はなくなったが、広い視聴覚室でたった一人でも空調を使用し続けることや、空調の消し忘れがあり、学生へ節電の指導をする機会が増えた。7月に講義棟1階女子和式トイレを1つ洋式に交換、8月に図書室の電灯の一部をLED化、講義棟1階多目的トイレの内壁紙を修繕した。また火災発生時に煙の拡散を抑制する垂れ壁の修繕は管理棟（1・2階）、講義棟吹き抜けとともに8月で修繕が終了した。台風10号の大雨により破損した管理棟エントランス前の庇は10月に修繕が終了した。さらに1月にはトイレフラッシュバルブの修繕を実施した。 備品購入では、前期に看護教育用シミュレータ、液晶プロジェクター、破損した普通教室2のスクリーン、体育館設置のスタッキングチェア、12月にタイトルブレーン、助産学科の授業用ノートパソコンが納品され、教員への使用方法周知を経て授業等で有効に活用されている。また、残りの予算で看護学科の陰部モデルを購入する。後援会で購入していただいた学生用プリンタも有効に活用されている。 防災体制としては、年度当初の4月に防災訓練を、5月には能登半島地震に派遣された清水病院DMATの講演会を実施して、能登半島地震を踏まえた意識高揚を図った。また、8月には南海トラフ地震に関する臨時情報（巨大地震注意）が発表されたことから、静岡市総合防災訓練に合わせて、学生の安否確認訓練を計画したものの、

		台風と重なり延期した。そのため、再度 11 月に学生の安否確認訓練を実施して防災への意識を高めた。 開校から使用している多くの備品が劣化、破損しているため優先順位を考えて購入計画を立てるとともに、校内の不用品の選定と廃棄を続けていくなど、教育環境整備を進めていく。
(7) 学生募集	4	【看護学科】 募集要項は5月中に完成し、高校訪問や進路説明会には昨年度と同程度参加した。聖火継承式には、高校生の参加があり、該当校の出身の学生が対応することで、本校の良さが伝わる機会になった。学校説明会は「オープンキャンパス」と名称を戻し、7月・8月合わせて171名（うち保護者51名）の参加があった。参加者アンケートでは、在校生との交流ができた良さの評価もあった。3月のオープンキャンパスでも、引き続き学生の力を活かした募集活動を継続したい。 ホームページは、年間行事のページを写真入りに変更し、学校生活に関する更新も写真を多く活用した。学生自治会運営のインスタグラムは学生・教員の協力・連携によりスムーズに運営できている。学校生活の楽しさが伝わるパンフレットは、「施設紹介バージョン」「教員紹介バージョン」を教員が作成し、「学生バージョン」は学生の協力も得て作成し、看学祭での配布や進路説明会などでも配布をしている。看学祭では、「ミニのぼり」の作成と投票を行い、優秀作品は高校訪問や進路説明会に持参して活用しており、学生の隠れた力を活かした学校PRになっている。教職員だけでなく、学生とも協力しながら、ボランティア活動を含め、地域や高校生への当校のPRができていると考えている。今後も、学生の力を活かし、より受験世代に魅力が伝わる取り組みをしていく。 入学試験の科目名の変更・推薦要件の変更の確実な周知では、高校生の新カリキュラムへの移行により変更となっている点を、高校訪問時には担当者に伝え、オープンキャンパスでは参加者に伝達している。また、高校新カリキュラムでの評価方法の変更による当校の推薦要件の変更についても、具体的な数値を示して周知できている。実際に、変更になった推薦要件での受験者も数名みられた。新カリキュラムについて試験作成者との情報共有・連携をすることで、確実な入学試験の実施ができている。 これらに取り組んできたが、入学試験の受験生は、推薦25名、一般27名と昨年度より22%減少した。少子化・大学志向に加え、高校生の早期に進学先を決定したいニーズがあり、試験時期を早めている学校が増えた。試験日程が変動している中でも、可能な限り近隣の看護学校との重複を避け、受験機会が得られるようにしていく。 【助産学科】 オープンキャンパスが1回のため、平日オープンキャンパスを開催した。5月の5日間で14名の参加があった。8名のアンケートが集まり、「演習の見学では学生同士がよくコミュニケーションをとっており、自分たちでもどうしてそうするのか気付くことができ、楽しそうだった。」「学校や授業の雰囲気を知ることでもできてよかった。ぜひ前向きに受験を検討したい。」等の意見があった。6月のオープンキャンパスには、43名の参加があった。34名のアンケートが集まり、「在校生や卒業生の話が聞けて、現実的にイメージができ、この学校で学んで助産師になりたいと思った。」等の意見があった。病院紹介には参加者の38%が参加した。病院からは、「当院を紹介し、知っていただく良い機会になった」という意見があ

		った。オープンキャンパスの参加者で、今年度の受験対象者が推薦及び一般入試を受験した割合は、オープンキャンパス 82.1%、平日オープンキャンパス 57.1%であった。 助産学科の周知と学生確保に向け、募集要項を各区役所に設置、実習施設や近隣の学校を中心に配布した。ホームページ上で助産学科だよりを適宜更新し、学校生活がイメージできるよう、行事だけでなく講義や演習の様子も掲載した。3月の更新では、学生に協力を得て学生目線での学校生活を掲載する。次年度も、引き続き効果的に情報を発進していく。
(8) 財務	4	令和6年度歳入歳出について適正執行した。 看護教育用シミュレーターについて5月に購入し、空調については、6月から9月の間に在宅看護実習室、講師控室、会議室、研究室1・2・3、校長・副校長室、保健室を修繕した。また、急遽であったが、台風の被害によりエントランス前庇の修繕を10月に実施する等、緊急性を重視し予算を執行した。 令和7年度予算要求については、図書室、ゼミ1・2・3、情報処理室、調理実習室、職員室の空調修繕のほか、教育用パソコンリース、看護教育用シミュレーターパソコン修繕、図書室システム更新及び開校30周年事業など必要な予算を確保した。 学習環境整備のために更なる施設・設備の充実を図っていききたいが、現状では、劣化した施設・設備の修理予算確保を優先している。
(9) 法令等の 遵守	4	【看護学科】 カリキュラム改正やペーパーレスが進み、学校便覧のリスク対策の記述事項が現状に沿っていない項目について教務会議で確認し、現状に合わせた方法を確認しつつ、追加修正を行った。 情報管理の方法の再確認と、共有フォルダーをつかった学生指導状況の情報と外部講師の授業資料の一元化にむけて話し合った。今後システムを統一し、管理をよりシンプルな方法に統一できるようにしていきたい。 【助産学科】 分娩介助10例を確保するため、今年度より藤枝病院で7・8月に分べん介助実習Ⅰを行う学生2名が、済生会総合病院でのローテーションで実習を行った。この実習では学生2名とも4例の分娩介助ができた。その結果、11・12月の分べん介助実習Ⅱでは、藤枝市立総合病院で学生2名とも10例の分娩介助に達することができた。 また、11・12月に清水病院で分べん介助実習Ⅱを行う学生3名のうち、2名が7・8月に県立総合病院、1名が清水病院で実習を行った。分娩件数が減少する状況に対応するため、清水病院では指導者と実習期間を検討し、9月に分べん介助実習を2週間延長した。12月には静岡県立総合病院で1日間の分べん介助実習も行った。その結果、3名の学生は一人10例の分娩介助を行うことができた。 どの実習施設においても実習時間を延長した夜間帯や土日の分娩介助実習を行わせてもらい、教員もその学生指導に入ったこともあり、助産学科7名全員が10例の分娩介助を行うことができた。 次年度もさらに分べん介助実習では分娩介助件数を確保することが困難となると考える。実習施設と実習方法を相談・調整し分娩介助10例を目指していく。

(10) 社会貢献 ・地域貢 献	4	学生ボランティアは、9月の救急フェアに参加した。令和7年3月には「静岡マラソン救護ボランティア」に参加する。行政からの依頼には必ず応じた。実習施設からの依頼が増え、参加した学生にとって授業では得られない社会経験につながっている。看学祭では、救急フェアで子どもの血圧測定をした関わりを活かす学生の姿もあった。地域とつながることをテーマに地域の方々を招き、地域へ向けた健康に関連する企画やバザーなどに加えて、市内の障がい者施設の事業所にブースを提供し施設の広報や事業内容を周知する機会をつくれたのも地域貢献のひとつになった。テーマに基づき、学生、教職員とも笑顔で楽しむための対応を意識する機会となった。引き続きボランティアの依頼を積極的に受け、学校から地域貢献できる機会を発信して「学生が社会を知る機会」をつくっていききたい。今年度は、ボランティアで得た学びを上級生から下級生に伝達する機会を設けた。下級生は上級生からの発信に熱心に耳を傾けていた。オープンキャンパスのボランティアも多く、学生が参加した、ボランティアの予定と学生の予定が合わなかったこともあったが、学生のなかには看護学生として学習した自身の体験を活かして地域に貢献していることを、学生の申し出や他施設担当者との会話の中で知った。内在している地域貢献を、互いに知る機会があるとよい。 市内高等学校あるいは進学ガイダンスは延べ28件参加して、職業選択の支援に結び付けた。 看護教員の力を活かした地域貢献としては、清水病院の院内研究指導が継続して行われている。昨年度に引き続き新人看護職員実地指導研修コーディネーターも担った。看護師基礎教育を考える会にも参加した。実習施設のひとつであるはーとぼる運営委員会に出席、1つの高校のマラソン大会に救護として参加した。教員のなかにはライフワークとして小中学校生に向けたいのちの授業活動を行っている。清水病院や近隣施設にモデル人形等備品の貸し出しも行った。引き続き看護教員の力や施設を活かした地域貢献を行っていく。
(11) 国際交流	4	両学科では、海外派遣経験がある講師からの講義や諸外国の医療・看護と日本における諸外国人の医療問題に着目して授業・実習を行った。学生にとっては、今まで自分の世界での医療だったのが、様々な環境下での医療があることを学び、医療環境と支援の相違に驚きと視野の広がりを感じた講義・実習となり、国際化を意識できる内容であった。助産学科では、講義の様子などをHPに掲載しており、当校の国際情報に関する学びを発信している。今後も継続していききたい。次年度はHPへの発信とともに、海外医療の実際を現地とリモートで結ぶ講義を計画している。また、地域の方に対して、オープンキャンパスなどで学びや講義内容の提示などを行っていききたいと考えている。今年度は、外国籍や海外で教育を受けた受験志願者はいなかったが、相談・要望があった場合の体制は整っている。今後、多様な文化をもった学生が増えていくことも想定できるため、体制整備・強化を図っていく。
(12) 教育力の 向上	4	看護学科の学習会では、「学生の思考を育てる授業・実習の方法」をテーマに年間10回の学習会を計画し、カリキュラムの進度に合わせたワーク等を実施した。学習会の中で「アセスメント力を育む指導」をテーマとしたオンデマンド研修を全員で受講し、実習で学生がアセスメント力を発揮するための実習準備が肝要となることを確認した。また、助産学科の教員はこのオンデマンド研修を業務内で個々に時間を確保し受講した。教員は参考図書を個人購入し実習指導に活用している。情報モラルに関する冊子を全学生に後援会より購入してもらい、実習準備など学生の状況に応じたワークに活用した。

		静岡県委託である看護協会の教員継続研修は新任期または5年以上の該当教員はいずれかに参加し学びを共有化した。 学科の枠にとらわれず、学生の学校生活や学習姿勢から気掛かりな様子が伺えるときは両学科の教員間で情報を共有しながら、対応方法について相談しあうこともできた。看護学科の学生はより専門性の高い知識を助産学科の教員からアドバイスを受けることもあり、学科を超えて学生のコミュニケーションをとり、教員が相互に協力しあうことができた。また、両学科の研究発表会(看護学科3年生は1月17日、助産学科は2月26日が学内研究発表会)に互いの教員と学生が参加しあった。学生の研究指導を通し、教員各々も自己研鑽に繋がっている。
--	--	---

6 次年度の自己点検・自己評価委員会の活動

- 1) 働きやすい環境の整備とマンパワー充足の取り組みとその状況を確認する
- 2) 多角的な新教育課程評価への取り組みとその状況を確認する
- 3) 30周年の歩みを地域に発信する取り組みとその状況を確認する